

弥生の出雲王に出会える

季刊

第62号

(2026年7月)



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★夏季企画展

「出雲の弥生人が使ったうつわたち

—あなたの推しはどれ?—」

7月4日(土)～9月23日(水・祝)

器とは、物を入れて収めるための道具です。私たちが日常的に使っているように、約2000年前に生きていた弥生人も、多様な器を使って暮らしていました。

出雲平野では、これまで弥生時代の土製・木製の器(土器・木器)が多量に発掘されてきました。しかし、その多くは破損した状態で出土するため、全体の形を把握することは容易ではありません。そこで本展では、形がよく残る器を約130点展示し、出雲の弥生人が使った「うつわ」を紹介します。

土製の器は、粘土紐や帯を輪積みして作るため、円を基調としたデザインがほとんどです。一方、木製の器は、鉄の工具などで加工できるので、円のほか、ひし形や方形などのものがあります。器はそれぞれの製作技術の特性を活かして作り出されているのです。

土製の器(弥生土器)に注目すると、その形状の違いから用途を推測できます。壺・甕・鉢は食べ物や飲み物を入れる万能容器、直

口壺や注口土器は飲み物(液体)専用、高杯は食べ物(固形物)の盛り付け専用と考えます。特に甕には煤が多く付着しており、煮炊きに使われたと分かります。さらに、遺体を納めるための器(棺)もあり、器の用途は多岐にわたります。

専用度の高い器は、いつ登場し、どのように増加したのでしょうか。出雲平野の例を見てみましょう。

食べ物を盛る専用の土製の高杯は、弥生時代前期(約2500年前)の矢野遺跡(矢野町)でわずかに確認されています。中期(約2000年前)になるとその数は増加し、これらに食べ物を盛ることが一般化したと考えられます。後期には木製の高杯が姫原西遺跡(姫原町)や五反配遺跡(大社町)で出土し、複数の材質で作られるようになったことがわかります。

一方、飲み物専用の土製の直口壺は、中期の中野美保遺跡(中野町)で確認されています。後期(約1800年前)になると、注口土器が西谷3

号墓(大津町)などで出土します。

このように、弥生時代後半期には専用度の高い土製の器が増え、器の機能分化が進み、暮らしの変化が読み取れます。

観覧者の皆さまには、さまざまな器をご覧いただき、ぜひお気に入りの「推しのうつわ」を見つけていただければ幸いです。

(坂本豊治)



出雲における土器の種類と専用度

★ギャラリー展

「いつまでも戦後でありたい2026」
～旧海軍大社基地

滑走路のつくりかた

6月24日(水)～10月5日(月)

今回の展示で紹介する大社基地は、出雲市斐川町を中心につくられた旧海軍の航空基地です。工事は1945(昭和20)年の3月にはじまり、終戦まで続けられていました。

今回の展示のメインは、基地の最も重要な施設である滑走路です。基地建設開始から最優先で工事が進められました。その作業は、海軍が中心になって進め、その主力は予科練習生というパイロットを目指す10代の若者たちでした。食糧事情も悪い中、過酷な労働を強いられ、事前の除草作業には小学生が参加するなど、住民も動員されたのです。

そうしてできあがった滑走路は全長1500m、幅60m。表面はコンクリートで舗装されています。ここからは、爆撃機「銀河」が出撃し、帰還しなかった機もありました。

滑走路の調査は、2021(令和3)年から継続して実施してき

ました。

これによって、滑走路の全形や構造などについて、多くの知見を得ることができました。その結果、滑走路がどのようにつくられたのかを詳細に復元することも可能になりました。今回はその成果を紹介します。

さらに、基地建設のための軍極秘マニュアルを紐解き、その記述と比較することで、大社基地の滑走路の特徴を明らかにします。

(黒田 祐介)



滑走路跡 全景(西から)

★ジオパークと出雲国風土記

島根半島・宍道湖中海ジオパークのテーマは、「出雲国風土記の自然と歴史に出合う大地」です。

約2000万年前に日本が大陸から分離し、やがて日本海や日本列島が形成されるという大きな地殻変動が起きました。この中で、美しいリアス海岸の島根半島や国内最大級の連結汽水湖の宍道湖・中海、豊かな生態系などが形成されました。

このダイナミックな地殻変動の痕跡は、733年に朝廷に献上され、唯一のほぼ完本として現在に残る『出雲国風土記』の冒頭に書かれた「国引き神話」を想起させます。

『国引き神話』では、八束水臣津野命が、出雲の国は小さくつくりすぎたといって、4回も陸地を引き寄せ、出雲国をつくったとされています。陸地を引いた綱が「蘭の長浜」と「弓ヶ浜」で、綱を結んだ杭が「三瓶山」と「大山」でした。

『出雲国風土記』では、八束水臣津野命が引き寄せた4つの陸地がつながる3つの場所を「去豆」「多久」「宇波」の「折絶」と呼

んでいます。これらの場所は、地質学的にも、地殻変動でできた大規模な断層や褶曲の起こった場所、岩石の種類が異なる地層の境界部分に相当しています。

また、陸地を綱で引く様子は、約2000万年前に大陸が分裂して日本列島が分離し、日本海に島根半島が出現した地球科学のプレート運動にイメージ的に似ています。

この地域は、歴史と自然、そして大地が一体となった国内でも珍しい地域といえ、このようなユニークな場所をタイムスリップした気分で楽しめるのが、島根半島・宍道湖中海ジオパークの魅力です。

『出雲国風土記』を一読してからジオパークを巡ることで、1300年前に暮らしていた当時の人々がどのように大地をとらえていたのか、その感覚がより伝わってくるかもしれません。

島根半島・宍道湖中海ジオパークでは、貴重な地形・地質とともに、この地域に根付いている自然や歴史・文化も織り交ぜた視点で、ジオパークの魅力を発信しています。

(植田 学志)

★学芸員のイチオシ!

「よみがえった弥生土器」

出雲弥生の森博物館では、出雲市内の遺跡から出土した土器など、数万点もの資料を保管しています。そこから選り抜いた逸品が、展示室に並びます。そんな展示品の魅力を伝えるため、学芸員イチオシの資料を紹介していきます。初回は、夏季企画展で展示中の大きな弥生土器です。

この土器は弥生時代後期（約1900年前）の大型の壺で、30年前に下古志遺跡（下古志町）で出土したものです。当初、頸から上と胴体は別のものと考えられていましたが、昨年当館で行われた研究会の場で、上下が合体！珍しい口の形をした土器の発見に、参加していた研究者からも歓声があがりました。その後、頸と胴体を接合し、欠けた部分を右こうで埋めると、ほぼ完全な形によりみがえりました。展示を観覧される際には、このエピソードを思い出してみてください。（景山このみ）



合体の瞬間！
市内では二つとない
珍しい形です。

★博物館ショップおすすめ紹介

出雲弥生の森博物館のミュージアムショップでは、様々な博物館グッズを販売しています。

今回は、ミュージアムショップで取り扱っているグッズの中から、「四隅突出型クッション」をご紹介します。

その名の通り、この商品は四隅突出型墳丘墓の形をしたクッションです。四辺が少しくびれた形をしているので、抱きかかえたときの絶妙なフィット感には定評があります。

もちもちとした手触りも、おすすめのポイントです。

クッションの表面には、当館マスコットキャラクターの「よすみちゃん」がデザインされており、当館らしいグッズの一つです。

ご来館の際には、ぜひチェックしてみてください。

★古文書の森をゆく⑳
旅は道連れ

先日、古文書を調査していたところ、男女17名が伊勢神宮に参詣したので許可してほしいと書かれた、寛政元（1789）年の古文書を見つけました。35日間を予定しているともあります。現在の大社町から伊勢神宮まで徒歩で、往復35日で行けるものなのかと驚きました。

江戸時代、庶民が旅に出ることは難しかったのですが、伊勢神宮の参詣を目的にした場合は比較的容易に許可が出たとされています。無許可の「抜け参り」でも、伊勢神宮の御札など証拠の品を持ち帰れば許されました。

また、江戸時代には「お蔭参り」と呼ばれる伊勢参詣の大きな流行が何度かありました。宝永2（1705）年・明和8（1771）年・文政13（1830）年が特に大きな流行でしたが、今回の古文書は寛政元（1789）年のものなので、明和の流行よりも少し後のこととなります。

宝永の流行は主に関東から中国の間の地域で流行しましたが、明和の流行になると全国に広が

り、東北から九州まで日本各地から参詣者が伊勢を目指しました。そして宝永の頃から伊勢神宮に向かう街道沿いで参詣者へ食事や宿などを提供する「施行」が行われるようになり、明和の流行の時には大坂の豪商たちが競うように施行をしたと記録されています。

一方で、現在のオーバートリズム同様、伊勢に向かう街道は人であふれて身動きが取れないほどとなり、宿や食事にありつけない参詣者が続出するような事態となっていました。

さて、冒頭の17名は無事に伊勢神宮に参詣し帰って来れたのか、ちよつと気になるところです。

（赤木 薫）



参詣者でにぎわう伊勢神宮
（歌川広重『伊勢参宮略図』安政2年・
国立国会図書館デジタルコレクション）

★展示のご案内

▼夏季企画展

7月4日(土)～9月23日(水・祝)

「出雲の弥生人が使ったうつわたち

—あなたの推しはどれ?—

●ギャラリートーク【無料】

7月18日(土)、8月9日(日)、

9月19日(土)

いずれも10時から・申込不要

▼ギャラリー展

6月24日(水)～10月5日(月)

「いつまでも戦後でありたい

2026 ～旧海軍大社基地

滑走路のつくりかた」

●ギャラリートーク【無料】

7月25日(土)、8月22日(土)、

9月26日(土)

いずれも10時から・申込不要

▼速報展

開催中～9月14日(月)

「立ち会う～中山丘陵遺跡・

矢野遺跡の新資料」

★講座・講演会のご案内

▼夏季企画展関連講演会

9月5日(土)

「うつわから弥生時代の

社会を探る」

●講師 河合 忍氏

(岡山県古代吉備文化財センター)

▼職員リレー講座

② 7月4日(土)

「一度は行ってみたい島根半島・

宍道湖中海ジオパーク

絶景スポット」

●講師 吉岡 正泰

(ジオパーク係)

③ 7月12日(日)

「火山災害を乗り越えた出雲

平野周辺の縄文社会と対外交流

—島根半島・宍道湖中海ジオ

パークの新たな魅力を求めて—

●講師 幡中 光輔

(埋蔵文化財1係)

夏季企画展関連講演会の申込について

定員 各80名／当日受付なし／無料

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●必須事項 氏名・電話番号

職員リレー講座の申込について

定員 各80名／各回300円

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●必須事項 氏名・電話番号

★体験教室のご案内

▼古代の鬼瓦をつくろう!

8月1日(土) 10時～11時30分

●定員 20人(先着順)

●受講料 無料

●申込 電話・FAX・メール

★館長古来夢

4月、兵庫県丹波篠山市にある

兵庫陶芸美術館を訪ねた。開催中

の特別展「This is S

UEK Iー古代のカタチ、無限

大!」を鑑賞するためだった。

美術館は、六古窯の一つ丹波

立杭焼の里に位置しており、硬質

の焼き物のルーツともいべき

「須恵器」の展示には力が入って

いた。全国から集められた作品数

は200件以上、重要文化財も16

件が含まれていた。「須恵器大成」

などの図録でお目にかかる有名ど

ころも目白押しだった。

陶邑古窯跡群(大阪府堺市)で焼

かれた初期(5世紀)の作品は、韓

半島の出土品と区別がつかない。

海を越えてきた職人たちにより須

恵器作りが始まったことがよくわ

かる。6世紀以降には、地方へも

技術が伝わり、地域色が現れるよ

うになる。

器台と一体化した壺に動物や

人物の飾りをぐると並べた作品

(大阪府南塚古墳)や平たい壺(平

瓶)を亀の甲羅に見立てた「亀形

須恵器」(広島県)など、愛らしい

作品も数多く並んでいた。しかし、

私を最も驚かせたのは大甕だった。

それは口径53cm、器高105

cm。胴径108cmもある巨大な甕

だった(8世紀末から9世紀初)。

容量は520ℓもあるらしい。し

かも口の一部分が欠けている以外、

傷一つない完全な作品だった。大

阪府島本町の指定文化財という。

どこの遺跡出土か、と説明を見る

と、なんと桂川と宇治川との合流

点の中州で住民が発見とあって二

度びつくり。島本町の上流には古

代の内水港「山崎津」があったか

ら、運搬途中に水没したものか

1000年以上の時を経て姿を現

したと推定されている。おそらく

酒の醸造や藍染めの容器だろう。

見てみたい方は、山口県立萩美

術館での巡回展(7月3日から9

月23日)へぜひ。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2026年7月

〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

(TEL) 0853-25-1841

(FAX) 0853-21-6617

(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp

https://izumoyayoinomori.jp

●入館料/無料

●開館時間/9:00～17:00

(入館は16:30まで)

●休館日/火曜日

(祝日の場合は翌平日)

年末年始

